

語学ラボラトリーと外国語教育

永井みち子

ことばの学習の最終目標は、そのことばを用いてコミュニケーションが可能になることである。しかし一口にコミュニケーションシジョンと云つても、spoken language によるそれと written language によるそれ、またそれらを専ら受動的に受入れる場合 (hearing, reading) と、能動的に用いる場合 (speaking, writing) との間にはかなりな相違がある。従つて、それらを習得する過程は当然単一のものではない。これまで主として written language に重点をおいてきた日本の外国語学習では、文字言語によるコミュニケーションは可能でも、音声言語となると、それが非常に初歩的なものであつても、理解に困難を覚えるという事実からも、これら両者の性格の相違が窺われるわけである。

しかし、だからといってこれら音声言語と文字言語は全く相反する機能をもつものではない。それは種々異なった面に重点をおいた teaching methods の結果を比較してみれば明らか

である。例えば grammar-translation method, direct method, oral approach, transformation grammar にもとづくものなどが試みられ、そのいずれもある程度の整った教育条件のもとでは、それぞれに成果をあげてゐるのである。oral approach ではたしかに聴き話す力が伸びてゐるし、grammar-translation method では読書力がついでに伸びてゐる。しかし同時に oral approach でも読書力の伸びが認められ、訳読方式のみで学んだ人でも、立派に聴き話す力を備へていることも事実である。この事実が示すように、音声言語と文字言語の間には、たしかにコミュニケーションの性格としての相違は存在するが、言語の本質としては、互いに他を否定し合うものではないのである。われわれが母国語を学ぶ過程をふり返つてみるならば明らかのように、まずわれわれは音声言語を習得する。その既習の音声言語の上に文字を重ねてゆく。その際に音声言語は文字の学習に決して妨げにはならない。本来言語学習とはかくあるべきものである。

ところが、外国語学習となるときさまざまな条件が介入し、必ずしも母国語を習得したのと同じ方法がよいとはいえない。まず第一に既習の母国語との間に linguistic interference が生ずる。日本語を母国語とするものにとつて、全く言語形式の異なる印欧諸国語を学ぶ場合、この問題は特に深刻である。次に学習者の年齢によつてもアプローチの方法を変えねばならない。また特定の言語の特定の面のみを学ぶ、即ち前述の受動的な面、あるいは能動的な面、更に細分すれば、hearing, speaking,

reading, writing とつた所謂四技能のうち、必要な面のみを重点的に学ばば目的を達せられると云うこともありうる。このように、自然に習得する母国語とは全く異なった条件下におかれている外国語学習を、母国語習得と同じ方法で行なうことには多くの矛盾が生じるわけである。

従って、最も効果的なことばの学習方法とは、学習者の最終目標に最も合致したものであることとなるのであって、それを無視して単にどの方法が有効か否かを論じるのは無意味である。むしろある方法が成功した際には、どんな教育条件があったか(学習者のタイプ、年齢、学習の動機、目的、学習の時間的要素、教育設備等)、ということの方がはるかに重要なのである。源氏物語の翻訳者 Arthur Waley は現代日本語は一言もしゃべれなかったといわれている。古典語を目標にしていた人にとってそれは当然のことであり、このような場合にも、まず aural-oral drill が必要であると説く者はいない。それは必ずしも古代言語と現代言語の比較でなくともいえることで、aural-oral skill に重点をおいた学習では、目的とする外国語が単に理解されるだけでなく、習慣的に automatic に駆使できるまでにそのことばの structural patterns を身につけることが要求される。音声の正確な聴覚像をもたねばならないのは勿論である。それに反し、reading のみに重点を置く場合は、書かれたものを理解するのに時間的な制約を受けることはなく、発音も実際の発話とは程遠くとも、理解の妨げにはならない。いいかえれば、この問題は結局 language と parole の区別と

いうことにならう。language はコミュニケーションの手段であり、parole は language によつてなされるコミュニケーションの過程といふことができる。従つて学習の重点が language にあるか parole にあるかによつて、それが言語についての知識でよい場合と、habits & skills の伸びを目指す場合が生じるわけである。しかしながら、目標とする言語が現代語である場合には、学習の過程において当然相互作用的にその両方の要素が影響し合い、先にも述べたようにいずれの方法でも正しく指導されれば、一方の機能が全く欠けてしまうことはあり得ないのである。何故なら、language を目標にした場合でも、言語には音声のないものではなく、思考の間も黙読の間も発声器官は動いているといわれるほど音声は切り離せないものであるから、その場合に hearing や speaking の能力が全く欠けてしまうことは考えられないのである。

二

このように多様な aspects をもつことばの学習の中で、数千人、数千人を対象にしなければならない学校教育においては、個々の学習者の目標を個別に満足させることは不可能であり、結局は彼らの目標の最大公約数に則した方向をとらざるを得なくなつてくる。従来までの外国語教育が grammar-translation 中心であったのにはそれなりの理由があった。即ち、外国語は外国文化を吸収するために不可欠の手段であつたということであり、しかもその場合に媒体となるものは主として文字で書か

れたものであったから、はじめに述べた言語学習の受動面、中でも reading のみがマスターされればよく、人と人との接触を通して音声面から文化を吸収しなければならぬといった必要性は殆どなかった。

ところが近年、外国語(特に英語)が外国文化の吸収に利用されるのみでなく、逆に日本文化を国外に紹介し、また国際社会で互いに知識、意見の交換を行なうための共通語へと推移してくるに従って、従来の文字言語による訳読中心の教育では社会の要請に応えられなくなり、音声言語を重視した教育の必要性が説かれるようになってきた。この社会の要請が、たまたま並行して発達してきた電気工学の力と結びついて、新しい言語教育機材として登場したのが語学ラボラトリーである。

日本での最近の語学ラボラトリー設置状況調査(昭和四三年三月現在)⁽¹⁾では、大学レベルでラボラトリーをもっているのは、国公私立併せて二二四校にのぼっており、これは我が国全大学数三六九校の約六〇%を占める数字である。換言すれば、語学ラボラトリーは、大学の外国語教育の中でかなりな部分を占めつつあると推定し得る数字である。

音声面に重点をおく教育の場合に必要なのは、正しい発音と発話のできる有能な教師であり、またその教師は倦むことなく正しい発音と発話を学習者に供給し続けることが要求される。しかし、前者の条件を満たす有能な教師というのは、当然その国語を母国語とする、あるいはそれに近い能力をもった、教師ということになり、その教は非常に限定される。殊にこの場合

は、その教師自身が正しい発音と発話を伝え得る informant であると同時に、その国語を外国語として教えるための言語学、言語教育の専門家であることが要求されるため、その数は更に少ないものとなるであろう。また後者の条件(反復練習を重ねる)を満たすことは、生身の人間にとって時間的、体力的に限界が出てくる。それにとつて代って登場したのが語学ラボラトリーなのである。ここで用いる教材は、音声言語教育理論に基づいて作られたものを、一度 native speaker に録音してもらえば、あとは殆ど無限に使用できるわけである。

語学ラボラトリーが外国語学習の場面に姿を現わしてよりもはや一〇年以上ともなった今日、その具体的な仕組を詳細に述べることは無用と思われるので、その利用方式及び教材を考察するために必要な最少限の骨子を概説するに留めたい。この設備の中心をなすのは、教材送り出し用のマスター・テープレコーダーと、それを受けとめる学生用イヤホン及びテープレコーダーであるが、それらの結びつき方に次の三種類がある。

- (1) Audio-passive (Listen only)
- (2) Audio-active (Listen and speak)
- (3) Audio-active-comparative (Listen, speak and record)

(1)は学生用に個別のテープレコーダーをもたず、マスター・テープレコーダーより送り出される教材の音声をイヤホンを通して聴くだけのものである。従って、普通教室で一台のテープレコーダーからの音を聴くのと変りはないが、イヤホンを

單軌反復練習			
解	正	解	正
教材用チ ナネル	Voilà une maison.	Voilà une maison.	Voilà une maison.
学習者チ ナネル	voilà une maison.		Voilà une maison.
反	解	正	反

つけ、また学生席が一人ずつ仕切られているため、より明瞭に発音が聴き取れ、精神の集中がはかれるという利点がある。(2) はやはり個別にテープレコーダーをもたない点で(1)と同様であるが、学習者用にイヤホーンの他にマイクがあり、そのマイクに話しかけた自分の声が、イヤホーンを通じて同時に客観的に耳に達する仕組となっている。また、そのマイクを通じた声が教卓にある調整卓を通じて教師の方にも届くようになっており、教師は個別に学習者の練習状況を検聴しながら、指示を与えたり一対一で会話を行なうことができる。その間他の学習者はそれに煩わされることなく各自の練習を続けられる。(3)のタイプは所謂フル・ラボと呼ばれるもので、(2)の仕組に学習者用録音機(これには通常一トラック又は四トラックのデュアル・チャンネルのものが用いられている)が加わったものである。学生はマスター・テープレコーダーから流れてくる教材を聴きながら、それを自席のテープレコーダーに録音し、同時にその教材の指示通りの発音、発話を試みると、それも録音される。テープ上の録音状態を图示すると次のようになる。

変形練習			
Dort steht ein Mann. Er ist alt.		Dort steht ein alter Mann.	
	Dort steht ein alter Mann.		do.

このように一度録音された教材は、そのあと再生してみることににより、モデルの録音と学習者自身の録音とを比較検討し、自らの欠陥、誤りを客観的に認識、矯正することができる。

三

このような設備の活用にあたっては、その利用目的、学習者のタイプ、レベルなどから、多様な可能性が考えられるが、ここでは対象を大学教養課程の外国語学習に限って考えてみたい。但し、その中で英語とその他の、おそらくは大学一年ではじめて接する、第二外国語とは、当然別々に考えねばならない。

語学ラボラトリーでの学習を有効にするための大切な条件は、次の二点にせよ。まず第一に、学習者は高い学習動機をもっていなければならないこと、第二に、かなりまとまった期間に、集中的に用いる所謂 intensive course に用いることである。

第一の点を英語に関連して考察してみよう。大学入学時まで、少数の例外を除いて学習者は音声言語には無関心であり(あるいは無関心であらざるを得ない立場におかれており)、その結

果、彼らの文字言語運用能力と音声言語のそれとの不均衡が甚だしく、音声言語として語学ラポトリーで扱ひ得る教材のレベルは、文字言語のレベルより格段に低いものとならざるを得ない。しかもそのような教材を母国語の介入なしに（理解の段階では当然母国語を媒体として教材内容を認知、把握しているべきで、ここである母国語の介入なしとは、*target language* を *native language* の形式に置き換える作業をしないという意味である）、学習者に反射的な反応が可能となるまで定着させるには、かなり辛抱強い反復練習が強制される。これは母国語の初期の学習段階に似ており、精神の未発達時期には比較的抵抗なしに受け入れられるが、すでに完全な *intellectual and emotional maturity* に達した成人学習者には、余程強固な動機づけがない限り困難な作業である。

第二の点に関しては、現在の大学のカリキュラム制度の枠に当てはめる限り、短期間の *crash course* を設けることは望み得ない。英語を専門とする大学を除けば、大抵は一コマが九〇分乃至一〇〇分単位で、それを二コマあるいは三コマ通年履習する規定になっており、仮にこの中の一コマを語学ラポトリーでの学習に当てるならば、一回にしては長すぎる時間を、一週間にしては少なすぎる回数だけ学習して、甚だ薄い成果を得るといふ結果を招くことになる。つまり時間割編成面は従来の *grammar-translation* 方式に便利なまま、そこに新しい学習形式と教材をはめこむところに無理が生じるわけである。そこで、まず第一の *motivation* の問題であるが、これには、

学習者の内面より必然的に生じてくるものと、外から学習者に与えるものとの二通りが考えられる。これらの二者は不則不離のものであって、学習者の側に内的必然性が皆無であれば、如何によく構成された教材を与えても受け入れられないであろうし、また逆に、受入れ態勢は十分備えていながらも拘らず、その内的要求を満たすに足る教材でない場合には、甚だしく学習意欲をそこなうことになるおそれがある。この場合最も困難な問題点は、先に述べた文字言語と音声言語との間にあるギャップである。学習者の知識的要求を満足させ、且つ音声言語の特質（個々の *phoneme, juncture, weak form, rhythm, intonation* 等々）を適切に指導し得る、という二条件を備えた教材を作成することは非常にむずかしい課題である。そこで現状ではどうしても、知的要求を満たすものよりはまず音声言語の特質を理論と実践の両面から導入し、次第に内容の伴ったものへと移行すべきであろうと思われる。但し、如何に初歩的な発音、文型練習教材といえども、単なる機械的な *aural perception test* や *pattern practice* ではなく、必ず何らかの *situation* を伴ったものを用いるべきである。また、はじめは短文、更に進めば長文の内容把握練習によって、英文を逐一日本語に訳すという従来の訳読習慣から脱却し、英文のままの語順に従って理解する訓練を行なうことができる。これは単に音声言語能力を養うだけでなく、英文の直読直解、*rapid reading* の基礎作りに役立つものと思う。

次に第二の時間割当の問題点であるが、根本的には、授業内

容に關係なく画一的な現行の時間割制度を、もっと内容に即して動かし得るものに変えられることが望ましいが(ラボラトリーでの学習は一定時間高度の精神の集中を要求されるため、一回の授業は四〇分乃至五〇分が限度である)、週に一、二回、正規の授業以外にラボラトリーでの学習を assignment として課すことにより、intensive course の形態に近づけることができる。尚、更に将来の利用形態として考えられるのは、大学レベルではすべてライブラー方式とし、教材面においてのみクラス授業と完全に integrate させてゆく方法である。

これら二点を両々相俟って理想の方向に近づける努力なしには、語学ラボラトリーの完全な機能の發揮を期待することはできない。

では、第二外国語の場合はどうか。基本的には *Day-Revision*、時間割当などすべて英語の場合と同様の原則が成り立つが、英語と異なるのは、殆どの場合、第二外国語は全くの初歩からスタートするという点である。そこで既習の文字言語とラボラトリーで扱かう教材とのずれという問題がなくなり、第二点の時間割の問題さえ解決されれば、理想的な形態としてラボラトリーを活用することができる。言語学習の初期の段階では機械的な反復練習は絶対不可欠のものであり、そのような学習の場に生身の教師が声を囁らす必要はないのである。教師の役割はそれよりもっと重要なところにある。例えば、英語の場合には教材が普通クラス授業と integrate していなくても、学生は一通りの文型と語いに習熟しており、ラボラトリーで単

独の教材を用いてもさして支障は起らない。しかし、すべての文法事項、語いが新しい入門期の学習では、ラボでの練習に入るまでに必ず一通りの知識を与えておく必要がある。教師はその *preparatory lesson* に力を集中するべきである。ラボラトリーは、そこで導入された事項を強化練習によって定着させる役割を果すわけである。

四

以上、大学レベルでの語学ラボラトリーの実践の立場にたつて問題を捉えてきた。最初に述べたように、ことばの学習にはさまざまなアプローチがあり、目的如何によっては音声言語からの学習が必ずしも能率的でない場合もあろう。しかし、現代語に関する限り、いずれの道をとっても互いに相補なって運用能力を高めていることは、これまでに発表されている数々の資料からも明らかである。ことばの学習の窮極の目標は、特殊な場合を除き、四技能のバランスのとれた習得である。その中で、これまで人間教師のみの努力ではカバーしきれなかった *hearing, speaking* の面を機械に受けもたせることによって(勿論録音教材の中では依然として人間教師が重要な役割を果さねばならないことはいうまでもない)、総合的なことばの学習に近づけるのではないかと思うのである。

注

(1) 田崎清忠著・英語科視聴覚教育ハンドブック(大修館、一九六八年発行)巻末付録による。

- (2) 語学ラボラトリーの詳細については、注(一)であげた文献の他、研究社発行、現代英語教育講座第十一巻、Edward M. Stack: *The Language Laboratory and Modern Language Teaching* (1964) 等を参照されたい。
- (3) 大学英語教育学会が一九六八年夏、全国大学英語教育関係者(学会員)に対して行なった実態調査アンケート資料によると、全回答数九一名中、七六名までが一コマの授業時間九〇分乃至一〇〇分と答えている。
- (4) 東大教養学部では新入生に対して hearing test を行なう、その結果が語学教育研究所発行の「語学教育」Nos. 282, 284 に発表されている。このような試みによって大学生の音声言語理解能力を把握する努力も必要であろう。
- (5) 次にあげるのは、situation を伴った発音教材の一例である。() 内の文字はすべて R または L の音を含んでおり、その部分をマランタにして埋めさせる。正確な音の識別と同時に、常識的(例えば Miami, Florida) 社会的習慣的(collect call) な要素も加味することが出来る。
- The telephone booths are (located) at the end of the (corridor). I went (directly) to them and (pulled) a door shut behind me. I used a dime, (called) Operator, and put in a (collect) call) to Miami, (Florida). The call went through very fast, and I exhaled a vast sigh of (relief) when I heard a (familiar) voice at the other end. I heard the operator say she

had a (collect) call) from (Lucy) (Rider) in New York and would she accept the charges.

- (6) 図書館で好みの図書を閲覧するようになり、語学ラボラトリーを自由利用に開放し、そこで学習者個人に好みのテープを貸し出し、自習させる方法をいう。

(7) John B. Carroll: "Research on Teaching Foreign Languages" の中に、アメリカ、オハイオ州の大学で、マランタ語の授業に全く伝統的な方法と、語学ラボラトリーを用いた授業とが試みられ、両者の成果に全く差異が認められなかったことが報告されている。

- (8) (a) 津田塾大学語学ラボラトリーのデータとして、「音を聴き分ける能力と、文章を聴き、理解する能力とは並行して進歩する」という答えが出されている。「英語教育」一九六六年十一月号)。文章を聴きとれるとどうことは、その structure を理解していることになり、必然的に読む力ともなるであろう。

(b) 本学入試英語書取テストの成績と入学後の英語講読テストの結果の相関関係にも、positive な関係が認められた。詳細は「英語教育」一九六六年十月号の拙稿を参照された。

(c) 一九六八年夏休みに開かれた COLTD (Council on Language Teaching Development) 主催の Intensive Training Course に参加者全員の前テスト、post-test の結果の比較から、oral と written language の理

解力の相関関係が非常に高いことが報告された。(一九六八年十月二十五日開催された大学英語教育学会総会においてITTC主催者、坪井忠二氏により報告された)。

(d) 本学一年生のフランス語学習者全員に関して、所謂 written language である文法の成績と、会話の成績との相関関係を調査したところ、(一九六八年度夏学期)、両者はかなり高い関係を示した。

参考文献

- 田崎清忠・英語科視聴覚教育ハンドブック大修館、一九六八。
現代英語教育講座第十一巻「視聴覚教室」研究社、一九六六。
Dutton, Brian (ed.): *Guide to Modern Language Teaching Methods* A. V. L. A. Publication No. 1. Cassell,

1965.

Harding, David H.: *The New Pattern of Language Teaching* Longmans, 1967.

Stack, Edward M.: *The Language Laboratory and Modern Language Teaching* Oxford U. P., 1964.

Stevens, Peter D.: *Papers in Language and Language Teaching* Oxford U. P., 1965.

Turner, John D.: *Introduction to the Language Laboratory* Univ. of London Press, 1965.

Wittich, Walter Arno & Schuller, Charles Francis: *Audiovisual Materials, their Nature and Use* Harper International Edition, 1968.

(一橋大学講師)